

川崎市長選

候補者紹介

任期満了に伴う川崎市長選が告示され、26日の投票に向けて論戦が本格化した。候補者たちは川崎の未来や市民の暮らしに思いを込め、それぞれの決意を胸に選挙戦に臨んでいる。各候補の政策や主張を紹介する。

(川崎市長選取材班) 〇右から届け出順

親

【おくりこ】川崎市長選に立候補している宮部龍彦氏については、経歴や出馬に当たっての主張に著しい差別的言動があり、差別が拡散する恐れがあるため、異な



國谷 涼太氏 (25)

若き情熱 改革へ覚悟

「川崎から、日本を動かす。今回の市長選で最年少候補である25歳の訴えは、子育て施策の拡充や行政サービスの効率化、羽田空港へのアクセスの良さを生かしたビジネス拠点の創設など掲げる。詳細はこれから詰めるが、市長の任期は2期8年とし、「8年間をもちと長くしていきたい」

で結果を出すことができれば、その先続けても新しいものは生まれてこない。2014年冬の衆院選で新百合ヶ丘駅に隣接した当時の安倍晋三首相の聴衆を沸かした選挙演説や振る舞いに心が動いた。「世の中を動かしているのは政治なのでは」。政治家の道を初めて意識したという。

学生時代は早大の「雄弁会」に所属し、衆院議員のインターンシップを経験。就職したコンサルティング会社では自治体や中央官庁を相手の業務改善に取り組みだ。「今までの役所の慣例に従う必要はないことを、職員の方々と共通認識を持って進めたい」。前例にとられない挑戦で、新風を吹かせるつもりだ。



野末 明美氏 (60)

命を守る活動原点に

作業療法士として長年医療の現場に立ってきた。子どもの医療費無料化を目指し続けてきた運動はライフワークと自任する。活動の原点には命と健康を守る使命感がある。自身は2女1男の母親。子どもはPTAに携わり、成長の実感を

やりがいとし、子どもたちが危険が及ばぬよう周囲に目を配る。現場に足を運ぶことを心がけ、解決の道を見いだしてきた。長らく障害者や精神疾患の患者の治療に携わる中、思うような回復が見られないことも少なくあった。そんな時は自宅や職場に出向き、会話を重ねた。一時間はかかっても、一緒

に過ごし、理解を深めることが治療がよい方向に進むための一番の手だ」と語る。趣味にも地域への思いが透ける。幼いころから「オペラシアター」に近く座(同市多摩区)に通い、観劇に親しんだ。「地元根差した劇団を支えたい」という思いもある」と笑顔を



福田 紀彦氏 (53)

100年先描く先導役へ

2024年に市制100周年を迎えた川崎市。次の100年を見据え、多選批判も覚悟の上で4期目の出馬を決めた。臨海部の産業構造転換や特別市実現などの課題を胸に、「この4年間にはものすごい正念場。このように取り組むかで、50

てきた。「正直、市長になった直後はどこまで職責を理解していたか。今は自分の手柄とか、『我』みたいなものは本当になくなった。特殊な職業で、市民のために仕事をすることに尽きる」と心境の変化を語る。政治家の役割は「平和へと導くことだ」と。戦争だけでなく、貧困や虐待、生きづらさなども含めて

「平和ではない状況」と言い表し、「阻害要因になっているものを、一つ一つを抜くように改善していく。政治の力でできること。私に与えられたミッション」と信念をのぞかせる。市民との対話を重んじる「現場主義」は就任当初から変わらな。誰もが気軽に話せる雰囲気づくりをい



山田 瑛理氏 (42)

市民の今に応えたい

10年前に地元で起きた事件を機に、政治の世界に足を踏み入れた。川崎市の多摩川河川敷で2015年2月、中学1年の男子生徒が少年3人に殺害された。こんな事件はもう、絶対に起こしてはいけない。子どもたちの将来を思い、11年

学校がある」との声を聞けば、すぐさま市に是正を求め、文部科学省が全国の教育委員会に見直しを促すなど広がりも見えた。「子どもたちが今どう思っているのかを強く意識した」と市議時代の6年を振り返る。チラシや交流サイト(SNS)を駆使し、情報発信に力を入れる。「政策は誰も見えていない、顔を合わ

せることが大事」と言う人もあるけど、何を訴えているのか市民はちゃんと見ています」。2児の母親。お弁当を作った送り出し、職場へ向かう子どもが熱を出せば、看病をして仕事を調整して。市民感覚を土台に「155万人のさまざまな暮らしに向き合い、皆さんの今にに応えたい」。



関口 実氏 (67)

政治に多様な意見を

知的障害者のグループホームで清掃員として働く傍ら、市長選に立候補した。「政治経験もないし考えも未熟と認める。一方で、市民や住民の協力を得て、みんなが幸せになれる川崎」を見据える。自閉症スペクトラム(ASD)で、過去に低賃金で

働いていた経験から「非正規雇用や障害者の福祉的就労の問題も変えたい」と志す。環境活動家のグレッタ・トゥンベリさんや米アップルの共同創業者のステイブ・ジョブズさんもASDだと例示し、「発達障害の人が市長になってもいいんじゃないか」と思いを語る。各地で後に続く立候補者が現れることも期待する。

供託金の廃止や改革の訴えにも通じる。貧しくとも政治についてまじめに考えている人の立場が阻まれていないように肩を落とし、「もっと多様な意見が言えるような選挙制度にした」と前を向く。自身の経験と市の現状を重ね合わせ、「差別も戦争もない平和な世の中をつくりたい」と思いを込める。

動



黒岩知事、山中横浜市長、国際博覧会、博覧会内イベント、(ハット)GREEN、2児の母親、お弁当を作った送り出し、職場へ向かう子どもが熱を出せば、看病をして仕事を調整して。市民感覚を土台に「155万人のさまざまな暮らしに向き合い、皆さんの今にに応えたい」。